# ひと横顔 インタビュー

## 中瀬康志さん

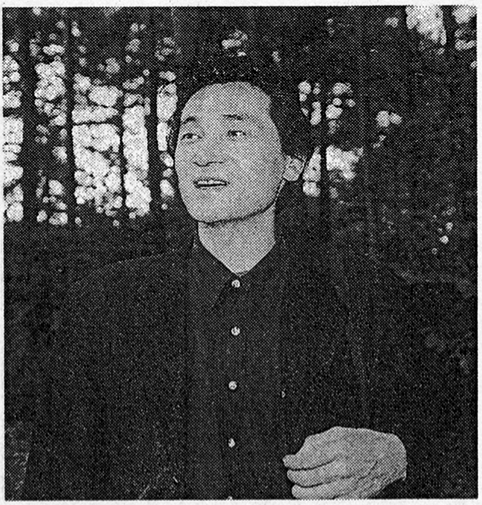
●青森市芸術創作工房のプレイベントに参加した平賀町出身の芸術家

## 五感刺激する〝装置〟制作

水槽には雨水がたまり、落ち葉が浮かんでいる。再び真っ暗な空間を手探りで歩き、別のドアから建物の外へ。雑木林の中に進むと、先ほどと同様の水槽が、今度は地面に埋め込まれている。青く着色された水面が、空や周囲の木々を神秘的に映し出している。

青森市が平成十三年十二月の開館を目指す青森市芸術創作工房（仮称）のプレイベント「インターナショナル・アーティスト・イン・レジデンス青森」（二十八日まで）に参加し、青森公立大・国際交流ハウスのそばに作ったのがこの作品。これまで屋内外の空間を生かした立体作品やインスタレーションを国内外で発表してきたが、本県で制作したのは初めて。建築関係者、主婦、タクシー運転手ら市民のサポートを得て、森を取り込んだ大掛かりな作品を十日間で完成させた。

「自然の中から建物に入り暗い所から明るい所、明るい所から暗い所へ移動する。同じ暗やみでも入る時、出る時では印象が全然違う。そういったものを体感して森に抜けた時に、どう感じるか」がコンセプト。建物の中は、音が流れ、松のにおいがする。視覚、きゅう覚、聴覚…人間の五感にかかわるものを詰め込んだ。「人工的な装置を通って目に見えない現象に触れる。忘れかけていた五感をあらためて感じ取れる装置と思ってもらえれば成功」。ひと仕事終え、さわやかな笑顔を見せる。



現在住んでいる神奈川県藤野町では「フィールドワーク・イン・藤野」の代表として活躍。町全体をアートフィールドと見なし、野外展、国際シンポジウムなどを継続して開催している。青森市が芸術創作工房の中核に据えようとしている「アーティスト・イン・レジデンス」を、芸術家が主体となって運営していく。

「美術は一般の中では異質なもの。それをみんなが避けることなく、どれだけ理解する努力をしてくれるか。美術家は純粋に物事を考えて自分の価値観を追求し、みんながそれぞれの価値観を持てるように示している。個々の価値観が立ち上がって、点が線に、線が面になっていくのが理想。そこに行けば何かが始まるというふうに工房が機能できればいいんじゃないかな」とエールを送る。

作品は二十八日まで展示された後、藤野町の自然の中で再び組み立てられるという。藤野町での活動に加え、二十日から東京・秋山画廊で個展が始まるなど、多忙な日々だ。（ん）

◆　◆

〈なかせ・こうじ　1955年、平賀町生まれ。弘前高校、東京芸大卒。同大学院修了。86―88年、西ベルリン大学に留学。93年、芸術と人と社会の関係の在り方を探るため「フィールドワーク・イン・藤野」を発足。賛同する約15人の芸術家に学生、地域住民、学芸員らが加わり、実験的作品制作、野外展、海外の作家を招いたシンポジウムなど、地域に根差した活動を展開。個展、グループ展多数。神奈川県藤野町在住〉